

スーダンとの 10 年

筆者とスーダンとのかかわりは 2011 年からであり、それは南スーダンが分離独立する直前の時期であったが、10年の月日が流れたことになる。今年 6 月からはリバーナイル州での技プロのフェーズ 2 が新たにはじまり、また新鮮な気持ちで 11 年目のスーダンに向き合っている。会社としてのスーダン経験も、この 10 年間で蓄積されて、複数の社員が関与し、案件数は通算 7 件となった。このように、ひとつの国・地域での技術協力を大切に、長期にわたって継続するのは、国際耕種で培われてきた伝統なのかもしれない。

スーダンとの関係は、2011 年 1 月に同国東部のカッサラ州での詳細計画策定調査が契機であったが、この調査に筆者が団員として加わるようになったのはまったくの偶然の賜物であった。その当時は、シリア、パレスチナ両案件のアサインがあり、それほど時間的余裕があったわけではなく、参加への申し出を断ることも十分ありえた。短期を条件に引き受けたものの、当時はシリア、パレスチナ案件にも気持ちが入っていたので、あくまでスーダンの仕事は 1 回限定のつもりであった。このとき断っていたら…その後の 10 年は全然ちがう方向のものになったであろう。

しかし、その後、シリアは「アラブの春」から内戦突入となり、実施していた技プロの続行が困難となった。そんな経緯もあって、スーダン案件にだんだんどっぷりつかっていくことになった。カッサラ技プロの 4 年間の終了時には、CPらとの協議にもとづき、タマネギの乾燥加工工場の再興を画策したりした。これが JICA 民間連携スキームでの案件化調査の提案へとつながり、さらに普及・実証事業へと展開して継続している。カッサラ州の次は幸いにリバーナイル州での技プロに参加する機会にめぐまれた。これは技術的には天水

農業から灌漑農業への転換で、スーダンをまたちがう角度からみることになった。南スーダン分離後は、主要な外貨獲得手段であった石油資源を失った 10 年間でもあり、農業セクターの近代化推進が強く要請されており、技プロでも灌漑農業の生産能の効率化を追求しようとしている。

このようにみえてくると、最初はまったくの偶然からはじまったスーダン業務であったが、スーダンとの縁を持続発展させようと意識的に努力してきたことに気づく。一般にコンサル業界では「来たタマを打つ」という言いまわしがあるが、国際耕種の場合は、なにより国・地域にこだわるのが重視される。筆者もそのような社風のなかでスーダンとつきあってきたといえるであろうか。



筆者は、もともと乾燥地農業に関心があり、主たる活躍の場を中東のアラブ地域とおもい定めていたもので、スーダンという国は、長期に取りくむ相手として不足はなかった。かつて JOCV 時代にシリアで出会った獣医師の折田魏朗氏には農業分野の技術協力は 10 年継続して一人前という趣旨のことを言われたことがある。言わずとしいた折田さんは、シリア国の発展に 40 年にわたり貢献されてきた方である。折田さんの域にはとうてい達しようがないが、ようやく折田さんの言っていた 10 年がたったんだという感懐もあり、すこし振りかえってみた次第である。

(2021 年 10 月 古賀)

*2021 年 10 月 25 日に発生した政変の影響で、日本人専門家の一時退避帰国措置となった。一刻も早くスーダンにもどり、業務を再開できる日を願っている。